若き光

題字：第５６代
高麗大記

令和６年２月２３日
発行：高麗神社々務所

「日高市国際交流協会の活動」

日高市国際交流協会
会　長　天野正男

日高市は、高麗神社様がありますとおり、高句麗そして渡来人の歴史のある町として知られております。

一九九六年に日高市と韓国　烏山（おさん）市との友好都市関係が結ばれました。そして市民レベルでの交流を図ろうと当協会が一九九八年に設立され、二〇二三年に晴れて設立二十五年を迎えました。烏山市との交流は、これまで四度にわたり市民訪問団を結成し烏山市を訪問しております。烏山市の市長さんを始め、多くの方に温かく歓迎していただき、各所をご案内いただいたことが、特に懐かしく思い出されます。

当協会は、先輩方が築き上げてきた烏山市との交流はもとより、もっと広く市内在住の外国人の方々に、困っている事がないか支援をしていこうと日々活動を行っております。部会は、「広報部会」・「イベント部会」・「日本語学習部会」と三部会に分かれております。中でも日本語教室は活動の中核となっております。日常生活などで一番に重要な事として二十年に渡り教室を開いておりますが、近年では会員の高齢化が進んでおり現在、若い人達がより参加しやすくなるよう環境づくりにも努めております。学習者の中には母国へ帰国してからもお世話になった事を忘れず、再び来日した際には日高市を訪れる方もおります。また習得した日本語を使い自国で仕事をされている方もおります。今現在、日高市内の外国人登録者数は一〇〇〇名を超えております。近年ではベトナムの方が増加の傾向にありますが、日本語教室には他にもペルー、フィリピン、スリランカ、インドネシアなど、様々な国籍の方が来られております。今後も市内の地域や小中学校に関係する方々とも交わり、少しでも外国籍の方にお手伝いできるよう、活動を続けてまいります。

令和五年度は、新たな試みとして、スリランカの方を講師とし、英語を使った小中学生対象のお菓子作り体験教室を開催しました。また、市民まつりでは、外国語の文字（モンゴル語、シンハラ語【スリランカ】、韓国語）を使い、名前をキーホルダーに書いてオリジナルネームホルダーを作るブースを運営し、一〇〇名を超える程の来場があり人気となりました。これからも子ども達が楽しく学びながら参加できる行事を企画するなどし、若い方が国際交流に関心をもってもらえるよう進めてまいります。日高市並びに市民の皆様のご協力をいただきながら、国際交流の発展に努めてまいりますので、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

韓国　烏山市訪問時の交流写真

日高市民まつりのスタッフ集合写真

社宝見聞録

二組の三十六歌仙額（さんじゅうろっかせん）
―拝殿を荘厳した歌仙額―

三十六歌仙とは、平安時代中期の藤原（ふじわらの）公任（きんとう）が選び出した歌人三十六人の総称です。三十六歌仙の詠歌と肖像を書き添えた額が「三十六歌仙額」です。

高麗神社には、慶長二年（一五九七）（写真１）、宝永三年（一七〇六）、寛政二年（一七九〇）、安政三年（一八五六）と、あわせて四回奉納されました。現存しているのは、宝永の歌仙額と、安政の歌仙額の二組です。

写真１　慶長２年
三十六歌仙額寄進札写

宝永三年の歌仙額は、長方形です（写真２）。慶長の額の表面を削り、再興されました。二八面が現存しています。

安政三年の歌仙額は、桐の厚板で作られた絵馬形です（写真３）。寛政の額の表面を削り、再興されました。全三六面が現存しています。昭和の御造営までは拝殿に掲げられていました。

写真２　宝永３年　三十六歌仙額　源公忠（みなもとのきんただ）

寄進者の子孫は、半数が高麗地区に健在です。御先祖が目にしていた歌仙額を子孫の方や、氏子の皆さんにもご覧いただきたく、紙面でご紹介します。

写真３　安政３年　三十六歌仙額　在原業平（ありわらのなりひら）

（横田稔　高麗神社主任学芸員）

お米 歳時記

お米は神への第一のお供え物です。苗から成長し収穫をむかえて供えられ、又次年の種となります。お米が順調に育ち収穫される事は、その地域の営みが順調であった象徴ともいえます。

二月 《祈年祭（きねんさい）》

祈年祭は「としごいのまつり」とも称し、秋の新嘗祭と対になる形で、古くから重要な祭祀とされてきました。五穀豊穣と国家安泰を神々に祈る祭りであり、宮中や伊勢の神宮をはじめ、全国の神社でも毎年二月十七日を中心に行われます。高麗神社では、二月二十三日に氏子総代参列のもと天長祭と共に午前九時より執り行います。祭典には、昨年収穫したお米の中より種もみとして使用する分を、ご神前にお供えしております。

神前に供える種もみ

祈年祭は氏子総代が参列し厳かに執り行われます

五月 《若光祭（じゃっこうさい）・お田植祭（たうえさい）》

毎年五月中旬頃に予定される親子参加型の「子ども神輿（みこし）」と「田植え」の行事です。神幸祭の祭典を行い、神輿を担ぎ境内を練り歩きます。神輿の後は、種もみから発芽したお米の苗をバケツの田んぼに植えるお田植行事を行います。高麗神社・熊野神社（新堀）・稲荷野辺神社（新堀）三社合同行事です。

右：神輿渡御の様子
下：バケツの田んぼに苗を植えている様子

創作紙芝居「お米よ 大きくなあれ！」
田植えから収穫までのお米の成長の物語
収穫祭にて上演予定

十一月 《新嘗祭（にいなめさい）》

毎年十一月二十三日は、天皇陛下がその年の新穀を神々に御神供なされる新嘗祭が、皇居・神嘉殿において行われます。これに倣い全国各所の神社においても新嘗祭が執り行われます。五穀豊穣を神々へ奉告し感謝する祭事です。社殿前には収穫祭で皆が刈り取った稲を懸税（かけちから）として　供えます。その後、一部を翌年の種もみとして保存し残りは精米してご神前のお供え物とします。

十月 《収穫祭（しゅうかくさい）》

十月上旬の土曜もしくは日曜に予定しています。五月に行った若光祭・お田植祭で田植えに参加した子どもたちが、たわわに稔った稲を手刈りし、「ハサカケ」にします。稲刈り後は、楽しい「かかし作り」や高麗神社で創作した紙芝居「お米よ 大きくなあれ！」の上演もいたします。

上：色紙を付けてかかし作り
右上：収穫祭の様子
右下：稲の刈り取り方を説明中

収穫祭で刈り取った稲の束を新嘗祭にて供えます（懸税）側ではかかしも見守ります

新嘗祭にて宮司が祝詞で五穀豊穣の奉告と感謝を申し上げます

神社まめ知識

『直会（なおらい）の意義について』

直会とは、祭りの終了後に神前に供えた食物やお酒を、神職をはじめ参列者の方々で戴くことをいいます。

古くからお供えして神々が召し上がった食物を人々が戴くことで、神々の恩恵を戴くことができると考えられてきました。この共食により神と人とが一体となることが、直会の根本的意義であるといえます。

簡略化されたものとして、お酒（日本酒）を戴くことが一般的な儀礼となっておりますが、これはお酒が神饌の中でも米から造られる重要な品目であり、また調理をせずにその場で直接戴くことができるため、象徴的に行うものとなりました。

神々にお供えした物を下げて戴くということは、宮中においても毎年執り行われる新嘗祭（にいなめさい）の際に、天皇陛下が親しく新穀を神々に捧げ、また御自（おんみずか）ら　召し上がるという儀礼に見ることができ、「神と人が共に食事をする」という祭りの根本的意義が示されております。

直会の語源を「なおりあい」とする説があります。神職は祭りに奉仕するにあたり、心身の清浄に努めるなどの斎戒（さいかい）をたします。神職作法で定める斎戒の規程には、「斎戒中は、潔斎（けっさい）して身体を清め、衣服を改め、居室を別にし、飲食を慎み、思念、言語、動作を正しくし、穢（けがれ）不浄　に触れてはならない」とあります。通常の生活とは異なる様々な制約があり、祭りの準備から祭典を経て、祭典後の直会をもってすべての行事が終了し、斎戒を解きもとの生活に戻ります。「なおらい」の語源は、「もとに戻る＝直る」の関係を示して、その役割を述べたものです。

直会が神事として重要な作法であり、一般の宴とは異なるのも、こうした意義をもって行われているからなのです。

平成 27 年 2 月 22 日撮影
祈年祭　祭典中の様子。平成 27 年は、社殿増改築工事のため仮社殿にて祈年祭を斎行いたしました。

同日撮影
祈年祭終了後、総会ののち直会を行います。
写真は、祈年祭で供えた御神酒をわけて、宮司先導のもと戴く所作を行っている様子です。
御神酒を戴く前後に一拍手を行います。

参考書「神道いろは」
監修　神社本庁教学研究所
発行　神社新報社

高麗神社を訪れた人々～文学編～

坂口安吾（さかぐちあんご）『高麗神社の祭りの笛』

高麗神社 宮司　高麗文康

昭和二十六年十月十八日、坂口安吾は二、三日前から身を寄せていた親友檀一雄宅を立ち、壇と文芸春秋社の編集者中野修を連れて高麗神社を訪れた。既に売れっ子の文筆家となっていた安吾は、雑誌『文春』に「安吾の新日本地理」という連載を抱えており、編集者を同行したのは、その取材もかねてのことであったからだ。

飯能駅に降り立った一行は、駅の広告に惹かれて当時、天覧山の麓にあった東雲亭で昼食をとった。東雲亭と言えば県下に知られた温泉旅館で、平山盧江（ろこう）が晩年を過ごすなど、作家文筆家がよく投宿することで知られ、昭和天皇の行幸にあたり、行在所にされたこともあった。安吾一行は田舎料理をゆっくり堪能したのだろうタクシーで高麗神社に到着したのは夕方だった。

境内での坂口安吾

“十月十八日”

高麗神社の氏子であれば誰でもわかるこの日の当社の光景を、安吾は「社殿の下に人がむれている。笛の音だ。太鼓の音だ。ああ、獅子が舞みだれているではないか。なんという奇妙なことだろう」（坂口安吾著『高麗神社の祭りの笛』以下記述がなければ同著）と受け止めた。翌日に例祭を控えたこの日は、祭りの準備と獅子舞の予行を行うのが常である。氏子はこの獅子の予行を、いささか訛って「ブッツォロイ」と呼ぶ。安吾一行は思いがけず、この「ブッツォロイ」を目のあたりにしたのだった。しかし、安吾が奪われたのは「目」よりも「耳」だったようだ。獅子舞の旋律を奏でる篠笛の音色を「物悲しく単調な笛」の音とし、「荒々しく悲しく死んだ切ない運命の神様を泣きながら慰めている」ように聞いた。筆で音階を伝えられないもどかしさからだろうか、「日本の音律に一番これによく似たものが、ただ一ツだけあるようだ。それは子供達の『も・う・い・い・かア～い』『まア・だ・だ・よーオ』という隠れんぼの声だ。」と郷愁をそそる説明を添えている。

撮影 昭和 20 年代

翌十九日、安吾一行は再び高麗神社を訪れた。あいかわらずピクニックのような気分は抜けなかったが、無計画でもなく、汽車に乗って高麗駅につくと川沿いを歩いて、高麗神社を目指した。到着した時、「獅子舞は山上の社殿跡に登っているという。ただちに山上へ急ぐ。」と早速、獅子を追いかけた。安吾が獅子の後を追った山とは、境内の西端にある小高い丘のような山である。作品中には「社殿跡」とあるが、実際は水天宮が祀（まつ）られている。「ホコラ」とだけ表現されているところを見ると、どんな祠が祀られているのか興味がわかなかったのだろう。

高麗駅 将軍標と坂口安吾

安吾はこの日獅子舞を見学し、獅子の笛の楽譜を手に入れた。いわゆる唱歌（しょうが）を書きとどめたものである。その唱歌を詳細に考察し「異国の山中に流れてきて死んだ亡国の一貴族の運命を考えれば、かかる哀調切々なる楽が神前に奏されることにはフシギがありません。」と締めくくった。

棒使いを先頭に参道を進む
撮影 昭和 20 年代

支度を手伝う一場面
撮影 昭和 20 年代

筆者はかつて、先代宮司 高麗澄雄に、安吾はどんな人だったか？、と質問したことがあった。作品にない裏話を期待してのことであったが、澄雄は、ぬっとした人だった、と言う主観的かつ曖昧な表現で答えた。作品中に「若い神官は、非常に正確に物を考え、正確なことだけ語ろうと常に心がけているようだった。それは教養の高さを示し、この奇妙な歴史をもつ村で、新しい教養を見るのがフシギのような、しかし好もしいものであった。」と客観的かつ具体的な賛辞で紹介された本人の感想にしては、ひどくそっけないと感じたものである。

この随筆は『文芸春秋』昭和二十六年十二月号に掲載され、その後、講談社から出版された『安吾の古代史探偵』にも掲載された。

59 代当主　高麗澄雄

坂口 安吾　略歴〈明治三十九年生〉 -本名は坂口 炳五（へいご）
昭和の第二次世界大戦前から戦後にかけて活躍した、近現代日本文学を代表する小説家の一人。純文学のみならず、歴史小説や推理小説、文芸や時代風俗から古代史まで広範に材を採る随筆、囲碁・将棋におけるタイトル戦の観戦記など多彩な活動を通し、無頼派・新戯作派と呼ばれる地歩を築いた。

地域歴史散歩

《信仰の山　日和田山（ひわださん） 編》

日和田山（標高三〇五ｍ）は、ハイキングの名所として、子どもから大人まで多くの人に親しまれております。

山を登り始めてまもなくすると、大きな石の鳥居が見え、緩やかな傾斜の「女坂」方面と、岩場のある「男坂」方面への分岐があります。どちらの道を行っても金刀比羅神社（ことひらじんじゃ）の前に合流し、登山者はお参りをして、更にその裏手から山頂への道を進んで行きます。

中着田から見た日和田山

金刀比羅神社

金刀比羅神社について埼玉県神社庁発行『埼玉の神社』には、祭神は諸書により一定せず、大物主命（おおものぬしのみこと）・崇徳天皇（すとくてんのう）、大国主神（おおくにぬしのかみ）、金山彦命（かなやまひこのみこと）など複数の神名が記されている。なぜ、日和田山に神社が奉斎されたのか、明確な伝えが無いが、氏子は火防・盗賊除けのありがたい神と伝えてきた、とあります。

日和田山頂に立つ「宝篋印塔」

山頂は、爽快な景色を眺め、お弁当を広げるなど、登山を楽しみ休憩を取る人で賑わいます。筆者が登頂した際に思った事があります。この山頂に立つ大きな石塔（推定三・五ｍ）、皆さん気になりませんか。これは宝篋印塔（ほうきょういんとう）と言い、「宝篋印陀羅尼（ほうきょういんだらに）」（呪文）を内に収めた仏塔の一種です。

礼拝供養することによって、亡くなられた方が現世で犯した罪を消し、極楽浄土へ往生できると信仰されています。石塔には「享保一〇年銘・聖天院三五世隆敞 建立」とあります。神社や仏塔、他にも中世頃の石塔の痕跡が存在したという『新編武蔵風土記稿』の記録もあり、古くから神様や仏様が祀（まつ）れ、信仰されてきた山であることがわかります。日和田山には、まだまだ私たちの知らない顔が隠されているのです。

上図：『埼玉の神社』より抜粋

金刀比羅神社からの爽快な景色

男坂の途中にある滝不動

《催事予告》

開催の一～二ヵ月前に詳細情報をホームページやチラシ・ポスターにてお知らせいたします。

第二十回　渡来人の里フォーラム

令和六年六月二十三日（日）十四時 開会

実施内容・「講演」および「トークセッション」

テーマ　・豊かな自然を生かす ～ものづくりの視点から～

講　演　・漫画家 やくみつる

他 出 演・香胡園 代表 鈴木香純　弓削多醤油（株）代表　弓削多洋一

歴史、文化、音楽、宗教、地理、工芸や技術など、様々な分野で活躍する専門家をお招きし、その分野の観点からお話いただきます。渡来人ゆかりの地を基に、これからの地域活性化に繋がる要素を探ります。

＜過去に開催したテーマ＞
第 18 回　高松塚古墳壁画
発見 50 年に寄せて
第 19 回 高麗郷の伝説 !!
地理の視点から地域の魅力を探る

第九回　高麗郡偉人伝

仮称「飯能市ゆかりの大名　黒田直邦（くろだなおくに）　展」

令和六年八月二十四日（土）～九月一日（日）

実施内容・「展示・講演会・ゆかりの地見学会など」

今日の礎には、先人達が困難に立ち向かい築き上げてきたものがたくさんあります。地域を代表する偉人たちの人生を学び、未来を歩んで行く一助となるよう『高麗郡偉人伝』を開催いたします。

＜過去に開催したテーマ＞
第７回　飯能出身 忠義の武人
中山信吉　特別展
第８回　社会事業や慈善事業に
貢献した教育者　発智庄平 特別展

祈願随時受付　毎日8:30～17:00　(12/31は、14:00まで)

※ご予約の必要はありません。

初宮詣・七五三・ランドセルのお祓い(3月上旬～4 月上旬)

人生儀礼各種・商売繁昌・厄除け・方位除け・車お祓い

高麗神社々務所　埼玉県日高市新堀 833 ☎042-989-1403

編集後記　担当・保々

今号で日和田山を取り上げたのは、昨年六月の「渡来人の里フォーラム」がきっかけです。日和田山のダイダラボッチ伝説を地理の視点から見つめ、地域の魅力を講演いただいた張大石（チャン テソク）先生が、最後の段で話された事が特に気になりました。『日和田山頂からは、神奈川県大磯町の高麗山が見える時がある』と。専門家でないと分からないかもしれませんが、若光様ゆかりの両地を結ぶその線も浪漫ですよね。